

【目的】

ホルター心電図の周波数領域で得られる画像情報がうつ状態の客観的評価に有用なことは既に報告した。今回は薬剤抵抗性を示したうつ病性障害例の自律神経機能のうち、ことにその経年的変化について検討を加えた。

【対象・方法】

対象は抗うつ剤への反応性が乏しい6例(以下 RD 群)、初回記録時年齢が37～72歳(平均年齢56歳)、観察期間8～57ヶ月(平均31ヶ月)。パワースペクトル解析の記録回数は4～14回であり、自律神経が外因性影響を受けにくい22:00～6:00までの連続8時間をサンプリング時間としてLF、HF、LF/HFの定量評価を行なった。また薬物療法が奏功したうつ病性障害9例(以下 R 群)、年齢33～63歳(平均年齢46歳)を比較対象とした。

【結果】投薬開始前のLF、HF成分は何れもRD群がR群に比し有意に低値であったが($P < 0.001$)、LF/HFは両群間に差異を認めなかった。治療開始後は投薬前と同様にRD群のLF、HFがR群に対し有意に低い成績が得られた($P < 0.001$)。そこでRD群について抗うつ療法前後のパワースペクトル解析に関して比較検討した結果、治療後はLFが投薬前に比較して有意に低く($P < 0.001$)、HFの場合多少高値化した($P < 0.05$)、LF/HFは治療前後の平均値が各々3.0、1.7でありHFが治療経過を通じてLFより相対的に低値であった。さらにRD群の4例は新たな精神的負荷によりうつ状態が増悪し自律神経活動がより減弱化した。

【まとめ】

- 1) 薬剤抵抗性うつ病性障害例ではパワースペクトル解析の共通所見として、うつ病相が顕在した早期の時点で自律神経両系の活動性が薬剤奏功例に比較して有意な減弱を示した。
- 2) 本疾患では治療期間を通じて副交感神経活動を反映するHF成分が交感神経活動を反映するLF成分より低値化したまま推移し、うつ状態の臨床症状と相関する治療経過が得られた。

【結語】

以上のことより副交感神経活動の定量評価は、うつ病性障害に対する薬物療法が奏功するか否かの予測指標になりうる可能性が示唆された。また本疾患例が新たな心理・社会的ストレスに直面した際には、より積極的な受容的精神療法や社会的孤立化を防ぐ意味での環境調整などが重要と考えられた。